

きょうは、早く学校からかえしてくれた。それは雨がたくさんふるからだ。学校からかえると、おとうさんが、

「まえでの川の水をとめるでこい。」

といったのでいったら、すごい水になっていた。五十センチぐらいの川が、あら井川みたいになっているので、ぼくはびっくりしてしまった。そしたらおとうさんが、

「そのふくろをおさえておれ。」といったので、おさえた。

そして、ふくろへ三つばかり土をつめたら、だいぶ水がすくなくなったので、ほっとした。M ちやが、

「上の方へ見にいかなか。」といったので見に行ったら、

「バリバリ」と音がした。見ていると、水がきたのでにげてくると、はたのほうへ水がきた。おとうさんは、

「もうこりや、まにあわんぞ。」といった。

そこへ、Y ちやほうのおいさんがきて、

「上があぶないぞ。」と行ってとんでいった。

ほうほうのおいさんたちもいろいろもってとんでいった。おとうさんだけはいかなかった。おとうさんは、畑へ水がはいらないようにしていた。でもそれはだめだった。畑へはいっぱい水がはいり、えんどうなどの野菜を、メチャメチャにしてしまった。おにいさんは、水がいけすにはいらないようにしていたが、それも水でみんなだめにしてしまった。こんど見ていると、ぼくの家の上のS ちやが全身どろだらけにしてとんでいった。どこへいくのかと思ったら、

Y ちやほうへたわらもちにいった。あとの人たちも、みんなたわらもちにいった。まもなく、S ちやたちが、たわらもちもってきた。S ちやが、ぼくの家のうめの木のちよっと上へ行った時だ。ゴーパーリバリバリという音もきこえてきたかと思うと、ぼくのせいも五倍も六倍もあるような、松川よりも広いなみがどつとおしよせてきた。ぼくはもうだめかと思って、家の中にと、だれかが、

「早くにげる。」といったので、あわててにげた。

ぼくのにげた時には、水がぼくのひざのきんじよまでになっていた。

ぼくはもうひつしでにげた。ぼくの家のぶどう畑へにげた時は、松川みたいになっていた。S ちやほうのうしごやがながれていった。それからもうきものままににげた。S ちやほうのかんそうぐらのところまでにげた。S ちやほうのかんそうぐらのところまでいくと、S ちやほうのM ちやが、あかんぼうをだいてなきながらきた。S ちやほうの上の家のこやがえがんで、いしがきからおちそうになつていた。そのうちに、S ちやほうのおじさんがはこばれてきた。だれかにきいたら、

「牛をこやからつれださつと思ってだしていた時、こやの屋根がつぶれてしたじきになってしまった。そして、どろがぐうつとかおの所へはいつてきて、い

きをとめていた。おじさんはくるしくなってきた。おじさんは足をゆすつてみた。もうごいたので、足をゆすればだれかが見つけてくれると思つてゆすつていた。そうしているうちにだれかがひっぱつてくれたのでたすかった。」

「三回いきをってしまったので、三回どろをのんでしまった。四回のめばしぬところだった。そしてしにそうなどころをたすけてもらった。」

（三十六年）